



**Data**

監督・脚本：宅間孝行  
出演：立川談春／原田知世／倉科カナ／市原隼人／入山杏奈／高橋メアリージョン／やべきょうすけ／布川隼汰／トミーズ雅

### ■■■ショートコメント■■■

◆宅間孝行は彼が初監督し主演もした『同窓会』（08年）（『シネマ20』353頁）を見て感心した監督。それがあったため、「逢いたいのになずっと逢えずにいた父と娘の愛にあふれた5日間の物語」だという本作に興味をもち、試写室に行くことに。

◆父親の六郎役を演じる落語家の立川談春の演技には違和感があるが、その内縁の妻・松岡玉枝役を演じる原田知世の演技の安定感はずがだ。また、まだ見ぬ父を捜すために父親が住んでいる田舎町にやって来た高島さつき役を演じる倉科カナの演技も、長い間女優業をやってるだけあって立派なものだ。感情の起伏が激しい本作の演技は大変だが、酔っ払いの演技を含めて、その感情を見事に表現している。

その他、物語の牽引役となるテキ屋の雨宮清太郎（市原隼人）や、その友人の的屋・福田日出子（高橋メアリージョン）、竹内力也（やべきょうすけ）たちの演技も少し過剰演出気味だが、それなりのもの。

◆本作で六郎が東雲六郎と名乗り、また経営している塾の名前を東雲塾としているのは一体なぜ。他方、なぜ六郎は玉枝を入籍して正式な夫婦にならないの。そんな疑問が本作冒頭の謎めいた“高島六郎”の失踪シーンとともに、何度も頭をよぎるが、それが宅間監督の狙いらしい。そういう意味では、多分彼が主催しているタクフェスでの舞台『あいあい傘』もよく出来ているのだろう。そして、昔の“嘘の母”を彷彿させる（？）本作のクライマックスにおける父娘のシーンでは・・・？

◆それなりの制作目的をもった本作だが、ストーリーの基本軸は単純そのもの。また、宅間監督が描く「あいあい傘」のイメージはよくわかるが、今ドキの若い世代にそれがどこ

まで通用するのは疑問だ。しかし、私としては『あいあい傘』というタイトルに彼の思いを込めた本作がそれなりにヒットすることを期待したい。

2018（平成30）年10月19日記